令和６年１０月吉日発行

会報　たづむら　第 129 号

鶴群

釧路市タンチョウ鶴愛護会発行

（題字：加藤秋霜氏）<皇太子殿下御歌碑より抜粋>

湿原で子育てをしていたタンチョウが、人里で姿を見せるようになりました。まだ頭から背中にかけて茶色で覆われた幼鳥を両親が守るように両サイドに立ち、エサを探しています。収穫後の畑などでは家族や若い群れが集まっており、観光客は車を停めてタンチョウを写真に収めています。

これから寒さが厳しくなり自然のエサが不足すると、給餌場を頼ってやってきます。今年は雪が多いのか、タンチョウの飛来数はどうなのか。高病原性鳥インフルエンザなどの感染症の心配も尽きませんが、雪原に舞うタンチョウに会える日が楽しみです。

愛護会　今後の課題

釧路市タンチョウ鶴愛護会　副会長　　大山　昇

私は昭和３７年４月、阿寒中学校に転勤になりました。そのとき鶴クラブを担当していたのが、伊藤先生でした。

当時の鶴クラブは熱心で、毎日のようにツルの観察や給餌活動を続け、それをツル日記に記録し、その成果を「日本の鶴」という本にまとめて公表しました。

自然の鶴に対する関心や情報の少ない時代だけに、中学生の鶴に対する関心や純粋な愛情や、餌不足に悩む保護活動は、多くの人々に感銘を与え、その後、鶴の愛護活動の発端ともなりました。

皆様のご協力のおかげで、当時２００羽そこそこだったツルの数も２０００羽に迫ろうとしております。皆様のご支援ご協力に心から厚く御礼申し上げます。

ところがここ数年の動きをみますと、必ずしも明るい見通しとはいえなくなってきました。まず、第一は、給餌場での餌の削減です。第二は釧路市タンチョウ鶴愛護会会員の減少です。第三は、孵化した幼鳥が育ちにくくなりました。特に今年はひどく、私の把握している４営巣地でも零となりました。

これらの課題解決のため今後取り組んで参りたいと存じますので、宜しくご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

ツルセンターだより

阿寒国際ツルセンターの裏に広がるビオトープ。今シーズンもたくさんの野鳥が新たな命を生み育て、暮らしました。

このビオトープの魅力を発信するため、夏鳥が飛来し賑やかな時期である 6 月 29 日から 7 月 7 日までの 9 日間、阿寒バードフェスティバルを開催しました。期間中の入館者は 700 人ほどで、バードウォッチングツアーやワークショップなどの参加者は 130 人を超えました。準備期間が短く、告知もあまり広くすることができなかったにも関わらずこれほどの参加実績となったことは、それだけ野鳥に興味を持つ人が多いという事でしょう。来年、再来年とステップアップしながら毎年恒例のイベントとする予定でおります。

人気のあったワークショップは、意外にも野鳥の解剖見学でした。釧路市動物園ツル担当学芸専門員であり獣医師の吉野氏に、野鳥の解剖そして剥製の作り方まで見せて頂きました。ツルセンターはタンチョウを見るだけではなくこのように命を落とした野鳥の解剖をし、死因を調査するなどの研究機関としても重要な役割を持った施設です。

また、ビオトープで水生昆虫や魚などを捕って飼育ケージで暮らすタンチョウ、ムックに食べてもらうという遊びを通じたタンチョウの学習をしました。お孫さんと共にご参加された方や、小学生のお子様と共にご参加されたご家族、幼少期にこうした遊びをやったと懐かしがっている方など、老若男女に楽しんで頂けたイベントとなりました。

その他、人気のシマエナガのワークショップもありました。シマエナガの伝道師である山本光一氏によるシマエナガの生態や行動の講座、そして本物のシマエナガから型を取った３D キットを使って色塗りをしました。本物のシマエナガに似せた色塗りばかりでなく、自分だけのオリジナルのシマエナガとして、カラフルに塗っていた参加者もいました。

シマエナガの本やパンなどのプレゼントもあり、参加者にはとても喜ばれるワークショップとなりました。

朝６時半からスタートの早朝バードウォッチングは、募集人数をはるかに上回る申込みとなりました。バードウォッチングを楽しむのは勿論の事、ビオトープの奥に流れる阿寒川にて朝食を楽しむという非日常体験が非常に評判よく、次回以降のこのイベントの目玉として取り入れて行こうと思っております。

バードソンという、ガイドを付けずに自身でビオトープを回り、確認した種類の数を競うゲーム性を持ち合わせた種目もつくり、この種目への参加者はバードウォッチングを初めて挑戦したという方や、バードウォッチング初心者という方が非常に多く、愛鳥者を増やす良いきっかけとなったと思います。

全体を通じて、開催して気付いた改善点もいくつかありましたが、開催できたことはツルセンターの新たな魅力を広く発信することができて本当に良かったと思います。

春になると渡来する夏鳥たち。美しい歌声を響かせて私たちを楽しませてくれました。繁殖のためにやってきた野鳥たちは、恋のお相手をゲットするために懸命に歌い、美しい姿を見せていました。さえずりを楽しむのは 5～6 月がベストシーズンだと思います。とっても賑やかな鳥たちの歌声がビオトープじゅうに響き渡るのですよ☆

お相手が決まると巣作りが始まります。鳥の種によって営巣場所や巣の形状が違います。時折、巣を発見することがありますので、じっくり観察すると良いでしょう。

懸命にエサを運び込む姿が見られれば、ヒナが孵っている証。じきに元気な声が聞こえてくることがあるでしょう。時には顔を出していることもありますよ。

そして、いよいよ巣立ちの時期。巣から出てきたヒナは、甘えん坊。親の後をついて回って、エサをおねだりします。やがて親を頼ることなく自力で採餌ができるようになり、独り立ちをします。

秋が近付くとカラ類は異種同士で集まり混群を作ります。群れで過ごす方が危険が生じた際には知らせ合い、危険回避ができるというメリットがあるようです。

秋が深まると、徐々に夏鳥は暖かい地へと移動を始めます。移動中に立ち寄る旅鳥も登場。とても警戒心の強いタシギですが、数日ビオトープで過ごしていました。よほど安心できる場所でなければ日中に姿を見せることはないのだそうですが、毎日姿を見せてくれていてビオトープの安全性を保証してくれているようでした。

人工給餌発祥の地として知られる阿寒町。山﨑定次郎さんが初めて給餌を行った時に設置してあったニオを再現し、そこでタンチョウがエサをついばむ姿を来館される皆様に見て頂きたく、昨年度より敷地内でトウモロコシを栽培しております。農業未経験者ばかりの手探りの作業ではありますが、今年も無事に実って収穫を終えました。ぶら下げて乾燥させています。これからボランティアの方々にご協力頂き、ニオ作りを予定しております。

更に、タンチョウの飛来シーズンに向けてビオトープの整備も行う予定です。草刈りや池の沈殿物の除去などを予定しております。ご協力頂きたい日時など SNS にて発信致しますので、ご協力頂ける方は是非お集まりください。

昭和５２年に開館したタンチョウ観察センターは、老朽化により今年度をもって閉館することが決まりました。

この施設ではたくさんの出会いとドラマが生まれています。最も有名なのは、西田敏行さん演じる池中玄太 80 キロ。ロケ地であるため、玄太に憧れるカメラマンが聖地として集まりました。先日、池中玄太役を演じた西田敏行さんがご逝去され再びこの地を訪れてほしいとの願いも叶う事ことなく非常に残念に思います。

また令和天皇が皇太子だった 1991 年に、この観察センターでタンチョウを観察されております。1993 年の歌会始では、タンチョウをご覧になった喜びを歌に詠まれました。この歌は、雅子さまを迎える喜びを詠んだ歌でもあります。

観察センターの閉館に伴い、感謝の気持ちを込めたイベントも予定しております。内容はこれから企画する予定ですが２月の開催を予定しております。是非多くの方に足をお運び頂きたいと思っております。

タンチョウ　豆知識

釧路市動物園　ツル担当学芸専門員
吉野　智生

ツルの羽で布は織れるのか

さて、いい加減しつこいかもしれませんが今回も羽のお話です。前回は、主に生えている部位や、機能の点から紹介しました。今回は羽のつくりや形についてです。

羽を一枚、眺めてみましょう。まず真ん中に一本、固い軸があります。これを羽軸（うじく）、その両側に広がる、一般に羽だと認識する部分を羽弁（うべん）と呼び、この基本形を持つ羽を正羽（せいう）と呼びます。軸の根元は、羽軸根と言い、根元には穴が開いています。これは皮膚に埋まっていて、元々はここから細胞分裂して羽が伸びていくわけです。正羽の他、羽軸がない綿羽（めんう）、羽軸はあるが羽弁がない準綿羽（じゅんめんう）などに分類できます。綿羽や準綿羽は皆さんご存じの、いわゆるダウンで、腹や胸など大きな羽の内側に生え、保温の役割を果たしています。他にトゲのような硬い剛羽（ごうう）、粉状になる粉綿羽（ふんめんう）、糸のような細長い糸状羽（しじょうう）などがありますが、タンチョウにはないので割愛します。

羽弁は一枚に見えますが、実は細い羽枝（うし）の集まりです。これをさらに拡大すると一本一本の羽枝には細かい小羽枝（しょううし）があって、隣同士の小羽枝がファスナーのように重なることでぴたりとくっつき、一枚の羽弁ができます。この小羽枝の重なりが鳥にとっては非常に重要です。小羽枝の重なりなので、本当に細かい隙間はありますが、水はここを通ることができません。鳥の体が雨の中でも簡単に濡れないのは尾脂腺の油を塗っているからではなく、構造上水が通らないので濡れないのです。一方で油や洗剤、泥などの汚れがつくとこの構造が乱れ、そこから水がしみてしまいます。タンチョウをはじめとして鳥が良く羽繕いをしているのは、単におしゃれとか格好つけてるわけではなく、羽の汚れを取り、体温の維持や安全に飛ぶための、実用的な理由があるのです。

さて、昔話の「ツルの恩返し」で、ツルが自分の羽で布を織るという場面があります。タンチョウの羽はかなり硬く、特に風切り羽や尾羽はそういう用途には向かないでしょう。では綿羽ならいいのでしょうか。とはいえ鳥の羽は羊毛などと違って、押してフェルトにできるわけではありません。糸などでまとめるか、別の布に貼り付けるか、はてまた袋に入れるかなどの工程が必要になると思います。したがっておそらく羽だけで布を織るのは厳しいのではないかなという結論になりますね。相変わらず夢のない話でした。

おしらせ

鶴クイズ

今年も鶴クイズを実施致します！

◆応募方法◆

ハガキまたはＦＡＸに答えと住所・氏名・年齢・職業・郵便番号・電話番号を明記し、下記へお送りください。釧路市タンチョウ鶴愛護会のホームページからもご応募頂けます。

◆応募締切◆

２０２４年１２月２０日（金）当日消印有効

◆当選発表◆

２０２５年１月上旬に、阿寒国際ツルセンターとタンチョウ観察センター及び愛護会ホームページに掲載いたします。

阿寒国際ツルセンター【グルス】
第１３回タンチョウフォトコンテスト

阿寒国際ツルセンターでは、阿寒国際ツルセンターで撮影したタンチョウをテーマとしたタンチョウフォトコンテストの作品を募集しております。応募締め切りは１２月２０日まで。（当日消印有効）応募作品をタンチョウ観察センター内に掲示し、来館者の投票により順位を決定致します。入賞作品は、オリジナルフレーム切手として販売されます。

応募要項は阿寒国際ツルセンターホームページまたは阿寒国際ツルセンター等に設置の応募用紙にてご確認ください。（http://aiccgrus.wixsite.com/aiccgrus）

ライブカメラがはじまります

今年も１１月上旬よりビオトープ、農園の二箇所でライブカメラの配信を予定しております。タンチョウの様子を、釧路市タンチョウ鶴愛護会のホームページより観察することができます。是非ご覧ください。

農　園

ビオトープ

丹頂感謝祭２０２５、鶴酒たしなむ会に向けて

2025 年 2 月 9 日に丹頂感謝祭 2025 を開催することが決定致しました。生涯を添い遂げるタンチョウの前で愛を誓う丹頂結婚式やワークショップ、子ども縁日のほか、キッチンカーなどが集まり食を楽しむこともできます。

この時に合わせて、ありがとう！タンチョウ観察センター！と題した観察センターの閉館に伴うイベントも予定しております。このイベントの当日は、阿寒国際ツルセンターは釧路市民の入館が無料となります。この機会に是非足をお運び頂き、ツルセンターの魅力を感じて頂ければと思います。

また、２月１日には鶴酒たしなむ会を予定しておりますよ。

傷病タンチョウを発見した時

これからの時期、湿原で子育てをしていたタンチョウが、飛ぶことができるようになった幼鳥を連れて湿原を離れ、人里で暮らし始めます。牧草地や収穫を終えた畑などで採餌している家族の姿をよく見かけますが、飛翔能力が未熟な幼鳥などは風に煽られて電線に衝突したり、車両との衝突事故などで傷を負ってしまうことも少なくありません。また高病原性鳥インフルエンザも各地で発生が確認されております。もし傷を負っていたり、うずくまっているようなタンチョウを発見した際には近づいたり触ったりせずに、下記へのご連絡をお願い致します。

環境省釧路自然環境事務所　電話番号　0154-32-7500

****

釧路市タンチョウ鶴愛護会事務局　〒085-0245　釧路市阿寒町上阿寒 23-40　阿寒国際ツルセンター内　河瀬

TEL(0154)66-4011　FAX(0154)66-4022　E-mail:mail@946tanchou-aigokai.com HP:http://946tanchou-aigokai.com/

****